説苑

歴代内務土木局長と其時代（六）

―水野錬太郎氏（二）

清水生

記者は前號に水野錬太郎氏のことは尙書きたいことがあるが誌上の都合に依つて以下は次號に讓ることにしたと附記して置た。それは水野氏の經歴が示す如く氏は四度臺閣に列し亦朝鮮政務總監として朝鮮統治の重任に當り或は貴族院議員として多年立法府に參劃し他面亦政黨の幹部として更に幾多公益團體を主宰して社會各方面に重要なる地位を占めてゐるから只だ單に一土木局長としての傳には餘りに廣汎に亙るからである。

前號には水野氏の土木局長時代を主として書いたが今度は次官から大臣へと順次に書いて見ることにする。第二次西園寺内閣の時であつたが原敬氏が内務大臣になつたその時の話ではあるが、原内相の心底には内務次官は水野氏か床次氏かこの二人の内で何れかを用ひたいと思ふてゐたのである。然し内務次官の椅子は一つしかないそこで原氏は水野氏と床次氏の二人を一緒に當時芝公園内にあつた氏の私邸に招いて、原氏から内務次官には君達の内で願ひたい

から二人でよく話合つてくれと云つたのである。兩人はこう原氏に云はれて水野氏は卽座に床次君は自分よりも年が上でもあり且官歷も先であるから內務次官は床次君にやつて貰らつたら宜い、そうして自分は床次君を極力援助すると虛心怛懷に云ふたのである。玆にも水野氏のあの＝高潔淸廉＝なる精神その崇高なる人格が現はれてゐる。かやうにして床次氏が內務次官となつたが水野氏は當時土木局長をやつてゐた、而して地方局長をも兼任してくれとの話であつたが、氏は土木局も地方局も重要な局であるからこの重要な二

局を兼任することはどうであろうか、他に適當な人物があればその人に一局をやつて貰ひたい、と茲でも固辭したが遂にその適當なる人が見出せず氏も仕方なく兩局を引受けて第二次西園寺内閣の倒れるまで兩局長を兼任したのである。こゝにも氏が兩局長を中々固辭して受けなかつたのは氏の人格の發露である。このやうな經緯で床次氏と原敬氏原敬氏と水野氏、亦氏と床次氏との相互の關係が深くなつたのはその時からである。第二次西園寺内閣の末期に氏を勅選貴族院議員に推薦したのも原敬氏である。これにも亦面白い美談がある。

或る時原氏は例の芝公園内の私邸に氏と床次氏とを招いて先に次官問題の時と略ぼ同樣に二人に對して兩人とも貴族院に入れたいと思ふて種々骨を折つて見たがどうしても古賀氏も入れねばならずそうすれば内務省から三人出すことは困難であるから君達兩人で話合つてその一人が入つて貰らうより仕方がない＝と原氏獨得の方法で水野床次兩氏に話したのである。この時床次氏は「前の次官の時に水野君が自分に讓つてくれたから今度貴族院の方は水野君に讓るのが適當である」と云ひ出したのである。水野氏も亦その好意に感じてそれではと床次氏の好意を受けて貴族院入りを承諾したのである。こゝで氏は事務官としての丁度十五年二月間の官吏生活に終りを告げて貴族院議員になつたのである。

第二次西園寺内閣は例の二個師團增設問題で衝突して陸軍大臣の辭職が火導線となつて瓦解したのであるが其の後に成立した桂内閣も彼の全國に渦卷く憲政擁護の聲は遂に支へきれずして僅に五十有餘日に倒壞するの已むなきに至つたのである。尾崎行雄氏が議政壇上に獨得の雄辯を揮ふて桂内閣を彈劾したのもこの時である。その結果次の内閣は彗星の如く出で來つた山本權兵衞氏に大命降下されて所謂第一次山本内閣であつた。山本氏に大命が降下すると共に氏は自から政友會本部に赴き政友會の政策を實行するから自分を援助してくれとあの有名な政友會禮賛演說をなしたものである。當時政友會内にはこれを援助すべしとなす

ものと、斷然山本内閣には反對すべしとなすものとの二派に別れて遂に尾崎行雄岡崎邦輔氏等二十餘名の脫黨を見るに至つた程であつた。而して原氏の態度は山本氏が政友會の主義政策を行ふと云ふことなればこれを援助すべしとなして三度内務大臣として山本内閣に列したのである。原氏が内相となると直ぐ氏を呼んで次官に懇望したのである。夫れで氏は次官就任を承諾する前に先づ以て床次氏を何所に用ひらるかに付いて原氏に尋ねてゐる。原氏は之れに對して床次君は恐らく鐵道院總裁になるであらうと答へたので氏も亦

喜んで次官就任を承諾したのである。友を思ふの赤心、氏の高德なる人格は亦こゝにも現はれてゐる。友を思ふの情の切なるものがある。世上稍々もすれば自己の榮達のためには多年の友も信義も顧みざる徒の多き世上に於て氏の如き人物を以て高潔無私と云はずして何人を指して云ふべきかと記者は切に感ずるのである。こう云ふ次第で氏は內務次官となつたのであるが其後大隈內閣の後を承けて寺內內閣が成立した際內務大臣は後藤新平伯であつた。後藤伯は內務次官にはどうしても水野氏に就任して貰ひたかつた。その爲めに後に滿鐵總裁になつた中村是公氏を通して屢々氏に次官就任を交渉したのである。然し水野氏は後藤伯とは懇意ではあるが原氏との關係上信義の上に於て如何に懇望されても後藤伯の下に次官就任は辭退し續けたのであつた。遂に奧田義人氏迄もその間に入つて原氏も克く諒解して氏は再び後藤內相の下に次官となつたのである。夫れには亦種々の經緯もあるがこゝでは省略することにする。

寺內內閣は議會を解散してゐる。その當然の結果として總選擧が行はれて、夫れも濟んだから氏は自分の使命も果したから內務次官を辭めて貰ひたいと後藤內相に度々申出たのであつたが直ぐにも特別議會が開會されると內務省關係の諸問題もある。諸法案もある、故に特別議會終る迄は辭めることを見合せてくれとの後藤內相の强いての懇請に依つて氏は兎も角も特別議會終了迄次官の職に留まることになつた。やがて議會も濟んだが偶々本野外務大臣が病氣でその激職に堪へないといふ理由で辭表を提出したので寺內內閣は一部改造をせねばならぬ事に立至つたのである。そこで後藤內相が外務大臣に廻りその後任に後藤伯は氏を內務大臣に推薦したのである。大抵の人は國務大臣の榮職にはその前後の思考もせず亦何等の抱負識見なきに拘らず直ちに承諾するものある中に卓絕せる識見と抱負＝四圍事情と信義等を重ずる氏は後藤伯の厚意は謝するも國務大臣の榮冠を即座に斷つてゐる。このことに付いて氏は當時の模樣を左の如く述懷してゐる。

私が後藤さんからその後任內務大臣に推薦を承けた時

私は後藤伯に對して、私は寺内内閣の閣僚となることは欲しませぬ。あなたが内務大臣としてやるにはどうしても自分に援けて貰はなければならぬといふことであつたから、已むを得ず内務次官となつたので私は大臣になることは毫も望んではゐません。殊に内務大臣は最も重要なる椅子であるから私より先輩の人をこゝに据へることが必要である。即ち田遞信大臣を内務大臣に据へその後任には有松法制局長官「英義」を持つて行つたらよいではありせぬか。私は別に何等の野心はありませんから、何卒さういふやうにして頂きたいと固辭したのであつたが、後藤伯はまあさう言はないで兎も角僕の後を引受けてやつて貰ひたい。併しながらさう固い決心を持つてゐるなら寺内總理に話して呉れといふことであつたから、私は直ぐ寺内總理を訪ねて只今後藤伯から私に内務大臣になれとの内話がありましたが私は御免を蒙りたいと思ひます。それよりは先輩であり又老練である田健次郎氏を内務大臣にしてその後に有松氏を据へたら宜いでせうと只今後藤伯に申上げて來た所です、後藤伯は一應總理に會つてその話をしろといふことですから私は今こゝに伺つてその意見を申上げる次第です。

と水野氏は當時の心境を率直に述べてゐる。然るに寺内首相は「この際頗る嚴肅な態度で國務大臣の任命に就ては私語は絶對にしない、一つに陛下の御命令を俟つのである。君を内務大臣にするといふことは、陛下の御命令である。實は既に内奏して御裁可に相成つたのであるから今更そんな勝手なことは言へない之を引受けるのが臣子の本分である」と答られたそうであるが、それで氏も亦已むを得ませぬから御命令を待ちますと寺内總理に言つて別れたのである。從つてその日の午後に親任式があつて玆に水野氏は寺内内閣の内務大臣となつたのである。

これは氏が臺閣に列したる最初である。氏が内務大臣となつて間もなく九月に例の全國に漲る米騒動が勃發して、これが直接原因で寺内内閣は總辭職をなしたのであるが、當時内務大臣として氏は就任期が極く短かかつたので格別

顯著なる仕事は殘さなかつたが若し氏にして寺內內閣に中途から入閣せずして最初から入閣してゐたならば相當の功績があつたと思ふのである。

寺內內閣總辭職の後に生れたのは原內閣であつて、これは卽ち純然たる政黨內閣である。氏は內務大臣をやめて在野にゐたからこの機會に戰後の歐米を視察する考のやうであつた。然るに氏は或る日原首相と會見の際その心持を原氏に話したら原首相から氏に對して暫時外國行は見合せてくれと切に止められたので氏はその希望を果すことは出來なかつたのである。其後氏は原氏から關東州長官に初代の文官長官として就任を慫慂されたが氏は考うる所があつてこれは固辭したので林權助男が氏に代つて最初の文官たる關東長官になつたやうな次第である。夫れから後ちに滿鐵總裁野村龍太郎氏が辭したので原首相は總裁候補者を各方面に種々苦心して求めたやうであつたが、何れも帶には短かく襷には長しと云ふ工合にて適當なる人物がなかつた、遂に白矢は氏に的つて滿鐵總裁就任の交涉を受けたのである。元來云ふ迄もなく滿鐵は名は一私設會社ではあるけれども當時我國の生命線たる滿洲の大陸政策に重要なる根源であつて滿洲政策を遂行するには敏腕にして德望あり亦抱負識見の卓拔なる氏の如き人物を原首相は極力望んだのであるが、氏は考慮の上滿鐵經營は寧ろ實業家より出す方が却てよいと考へて、これも亦固辭したので早川千吉郎氏が後任となつたやうな次第である。

氏の淸廉無私の性格はこゝにて克く現れてゐる。卽ち自信なき仕事には如何に先輩たる原敬氏の懇請にて二度迄も固辭してゐる。然しながら氏のこの淸廉無私なる性格と手腕力量を見拔いてゐる原敬氏はどうしても氏を一役に持つて行き國家の爲めに盡させねばならぬとの信念の下に時は大正八年六月二十七日の夜八時頃である。原氏から水野氏に對して至急會いたいとの電話をして氏を招いて朝鮮總督府政務總監就任の交涉をしたのである。

玆で一寸當時の朝鮮の狀況を書いて置くが當時原首相は朝鮮統治上の改革に付て種々意見を持つてゐたのであるが

時恰も朝鮮には萬歳騒動なるものが起つて朝鮮は紛亂の巷となつてゐたのである。夫れが原因となつて根本的に改革するの必要上から第一に官制の改正を斷行して憲兵制度を廢して總督府の部局制度に變更を加へたのである。これが當時武斷政治であると云はれてゐたのを時勢に適應しないから文化政治を行ふ必要があるといふ下に官制改革を斷行して從來朝鮮總督は陸海軍大中將を以てこれに充つるのを改めて文武官何れからでも任用が出來ると共に憲兵制度を普通警察制度となし更に部局制度を改めて局制としたのである。

偖て原首相が水野氏を電話で來邸を求めて政務總監就任を懇望したのであるが、その時の水野氏に對する原首相の話は、

齋藤海軍大將を總督にするに付てこれを輔佐するために政務總監になづて貰ひたいと思ふ、この地位を煩すは甚だ氣毒で言ひ悪いことではあるけれども、國家の爲めに是非承諾して貰ひたい。

とのことであつたやうである。氏は曩には關東長官も滿鐵總裁も凡て斷つた關係上今亦斷るのは甚だ工合が悪いと思ふたので即座に返答せずして考へて置くと言つてその夜は別れたやうである。氏も朝鮮總督を文官にするのはよいとの考を持つて居たのであるが武官總督の下で政務總監たるはその地位の如何を問わず頗るやりにくいと考へ殊に朝鮮は目下紛亂の際であるから果してその職責を全うすることが出來るか否やも疑問であると考へ、これは斷る外はないと思ふて原首相に對して手紙にて婉曲に斷つたのである。然しながら氏は其後數度原氏の懇請を拒み難く遂に原首相の苦衷を察して朝鮮政務總監の大役を引受けたのである。

當時氏はその引受けに際して原首相に述べてゐる處を見ると、

私は眞實朝鮮行は嫌だと思ふのですが、それ程迄に私を所望せられるなれば仕方がありませぬ應じませうあなたの意思に從ひませう。而して一旦引受ける以上は自分は渾身の努力を盡して朝鮮統治のため國家のために盡し

ます。而して自分の苦痛は度外視し且つ又世間の毀譽褒貶は顧みずに、どこまでも邁進する覺悟であります、云々。

と氏が原氏に云つてゐるのを見ても當時氏は悲壯の考へを以て齋藤實總督を輔佐して朝鮮統治の大任に當る意氣と負抱とを見ることが出來る。これが氏が朝鮮政務總監になつた經緯である。

近代に於ける人傑原敬氏は大正十年十一月四日東京驛頭で宰相の印綬を帶びた儘兇手のために斃れたのは國民は悉つて國家のため悲みの意を表したのである。その後を承けて首相となつた高橋是清男は其の翌年內閣改造から引いて政友會內に紛擾を惹起して內閣不統一の責を負ふうて辭職したのである。其の結果大命は海軍大將加藤友三郎氏に降下して所謂加藤友三郎內閣が出來上つたのである。これが大正十一年初夏の候六月であつた。丁度其の時に水野氏は朝鮮總督府の用務を帶びて上京中であつた。突如加藤氏から內務大臣として入閣の交渉を受けたのである。この際に氏は卽答を避けて上京中であつた齋藤總督を四谷の私邸に訪ふて內相就任交渉を受けた顚末を述べてその意見を求めたのである。齋藤總督の下にこれを輔佐してゐる水野氏の人格としては最もの事である。齋藤總督は加藤氏が內閣を組織するに當つては力强き援助者を要する事は云ふ迄もなく、殊に加藤君は余と同樣海軍部內に居つたのみであるから一般政治方面に就ては十分の經驗なくこれは丁度余が朝鮮總督に就任した時と同樣で誰れか行政上に堪能なる人を要することは勿論である。水野氏が三年近くの努力に依つて朝鮮統治の方針も確立し亦紛擾も略ぼ平安したるを以て此際は政務總監には他に適當の人もあるべく、更れば加藤氏の要望に應じて加藤內閣に連なつて內務大臣を引受くるも國家のために可ならんとの意見を氏に對して吐露したやうである。玆に於て氏も意を決して二度輔弼の重責を帶びたのである。これが氏が二度目の內務大臣就任である。其の後に於ても氏は大正十三年に淸浦奎吾子が大命を拜して組閣した際に、その懇望に依つて三度內相の印綬を帶び、

更に昭和二年に田中内閣の下に文部大臣として入閣四度び臺閣に連らなつてゐる。これ等の經緯は永くなるからこゝでは省略することにするが、斯樣に氏は實際的に卓絶せる政治家行政家であると共に他面學識豐富なる學者である。

往々にして世間では、氏の行政家たるを認めて＝法學博士＝學者たるの氏の片面は餘り多くは知れてゐないやうに思はるゝ、これは或は記者の誤りであるかは知れんが少くとも記者は左樣に感ずるのである。そこで氏が學者であることを一二例を擧げて見ることにする。

水野氏は屢々種々の問題に付てその意見を發表されてゐるが、殊に政治學の範圍に於ても澤山の論文意見が書かれてゐる。こゝに夫れを全部掲げることは到底紙面の許す處ではないから遺憾であるがその内に「歐米に於ける立憲政治」と題して可なり永き論文がある。

其他歐米各國に於ける議會政治や政黨と内閣論や自治制度に關する論文等擧げて枚擧に暇なき程豐富なる學說と識見を以て或ひは各國碩學の言を引用してこれに批判を加へ又は氏獨自の卓絶なる意見を發表されてゐるが、畢竟氏は思想的には皇室中心主義忠君愛國を以てその源泉となし政治的には大權統治を以て根源となし不磨大典の憲法の運用宜しきを得て國力の益々充實國家の益々發展を期するに力を致すにあると記者は觀察する、これは氏の廣汎なる論策集を讀んでも首肯せらるゝのである。

記者は常に我國の幾多の政治家達はその行動に於てその吐露する意見に於て或は又その識見等に於て少數の人を除くの外はあまりに低級であることを遺憾に思ふてゐる。これは敢て記者獨りの考へではない恐くは多數國民は左樣に考へてゐるであらう。夫れは恐らくは卒直に云へばその修養と讀書の足らざる所以に外ならないではなからうか、この點に於て水野氏は實際に於ても堪能なる行政家であると共に修養の積むだ人格者であり、亦非常なる讀書家である。これなるがために氏が今日迄實際的に行政家として行つた事蹟を顧れば凡て實際と學理とを併用して加ふるに道德を基幹とする一種の哲學政治であると云へる。これが所謂國

利民福に基本を置いて何事もこれから發展をなしてゐる、我國の文化向上發達に貢献されたことは偉大であると思ふのである、氏は今尚餘閑を得ればその書齋に立籠つて政治經濟の書は元より宗教哲學文藝其他萬卷を繙きこれを夫々咀嚼して實際に活用することを忘れないのは誠に敬服に値するのである。

記者は前號に於て眞の愛國者とは高潔無私明鏡止水の如き良心を以て烱眼よく國民を指導し暗中模索せる大衆の面前に於て勇敢に表示する人である。これは克く水野氏に當て篏まるといつたのはこゝに一例を擧げることにする。夫れは水野氏は溫情高德の士であると共に國家に是なりと信じたことには勇猛果斷にことに當る所謂勇敢に表示する人であるからである。これは前にも一寸書いたが大正七年四月寺內內閣の下に後藤伯が外務大臣となり、その後に水野氏が內務大臣になつた時のことである。同年の八月にあの有名な米騒動が起つたのであつた。氏は同月十四日に日光御用邸に御滯在中の　兩陛下に拜謁して夕刻歸京すると時の警保局長永田秀次郎氏から今日の閣議に於て戒嚴令施行の議が內定した旨の報告を受けたのである、その翌日の閣議には果して戒嚴令施行勅令案が提出されたから氏は寺內首相に對して閣議決定に際して最も重大なる關係を持つ內務大臣の意見を徵せられなかつた理由の說明を求めた後更に氏は「戒嚴令なるものは國內の擾亂危殆に瀕し內亂狀態に陷つたやうな非常の場合に施行すべきもので今日の狀態は地方官憲の權限內で取締ることが出來るし若し其の力が足りないなら出兵を要求することも出來る、決して戒嚴令を施行しなければ騒動を鎭壓することが出來ない程度とは思はないから自分は輔弼の閣臣としてかゝる事を上奏するに忍びない若し內閣が强いて決行するとするならば自分には決心がある」と閣議の席上で强く主唱したのである。寺內首相は「內相は未だその時機でないと言はれるならば時機を俟つことにしてもよいが只だ準備の爲めに閣議で決定して置きたい」と意見を述べ後藤外相仲小路農相などは戒嚴令施行の必要を力說し他の三四の大臣は閣議案に署名し

て多數で決定されるやうな狀態となつた。ところが有松法制局長官は水野內相の意見に贊成して今日の閣議で決定するは宜しくないとて署名の皆まで濟まない閣議案を持つて行つてしまつた。その時の閣議はこのやうな狀況で終つたが其の翌日後藤外相は水野內相を訪ふて切に飜意を求めたが水野氏は「あなたは私に同意を迫る前に辭職を强要さるゝのが當然と思ふ。若しあなたが內相であつて戒嚴令施行に同意されるなれば私は第一にあなたに辭職を勸告しようと思ふ。私は單に一身上の都合から云ふのではなく國家の爲めに不可であると確信するからである」と云ふて先輩たる後藤伯の切なる勸告にも氏はどうしても聽かなかつたのである。かくてあの米騷動に際して不祥なる戒嚴令は施行せられずして濟んだのである。この一事を以てしても水野氏は國家のために是なりと信ずることには如何に先輩の言葉にもこれに從はずして自己の意見を貫徹する所謂强き意志の持主である。これが眞の愛國者で烱眼よく國民を指導し暗中模索せる大衆の面前で勇敢に表示する人であると云はずして何をか云ふべきやである。

水野氏は現在幾多の公益團體にその主宰者となつてゐるが機會ある每に現下非常時我國の進むべき道を說れてゐる現に這般氏が會長たる港灣協會總會が東北秋田に開催された際にも來會者一千餘名の席上氏は力强く「皇軍將兵に感謝の意を表すると共に銃後國民の時艱克服の決意を一層强固にすべきことを縷々說かれてゐる」。支那事變は玆に三周年を迎ふと雖も未だ蔣政權は壞滅してゐない。事變の前途は尙多難である。殊に日々走馬燈の如く變る國際政局に對所する內外多事の我國は實に容易ならざる難局に遭遇してゐる。加ふに歐洲の大戰は我國の多方面にも至大の影響を及ぼさないで置かないのである。交戰滿三ケ年赫々たる武勳尙且倦むことを知らず徹底的に敵を潰滅せずんば熄まざる旺盛なる此精神これこそ我大和民族の世界に對する矜持でなければならぬ、惟ふに榮光は必ずこの崇高なる犧牲心に對して來り酬ゆることは吾人は强く確信してゐるが、嚴に驕慢を戒め大業の異日の大成に期待しなければならぬ、

これには國民は前線銃後一體となつて更に一段の緊張を以て聖業の達成に邁進すべきである。水野氏は機會ある毎に公會の席上に或るひは各種の會合でこれを强調してゐる。記者の畏友平井洮民氏は本誌卷頭言で「日支事變と歐洲戰爭とは全世界に展開せられて居る動亂であつて世界新秩序建設の爲に生起した十字架の苦であり、產みの惱であり、試錬の火である。舊きは廢たれて新らしきものゝ發生期に生ずる現象である。此東西に於ての葛藤は恐らくは世界政治の新形態を結果つける革新的氣運であらう、この趨勢に適應し東西をして眞の和平の新天地たらしめんとせば新らしき國家體制として政治組織も經濟機構も社會組織も國民生活も總ての方面に革新を加へ國家と國民とは一體化しなければならぬ。云々」と云ふてゐるが現下我國の行くべき途はその一途にある。玆に於て一層記者は水野氏の如き人物の益々自愛健壯ならんことを望むのである。

氏の傳はこの位にして擱筆することにするが最後に氏は歐米の學に精通してゐると共に他面東洋學にも造詣深く亦香堂と號して詩文を克くする。氏が澤山の詩作中特に氏が朝夕三思說を說へ先賢を敬慕してゐる慕賢堂人物中の原敬氏に關する氏の心境を吐露したる作詩外數點を擧げるに。

盛岡大慈寺

白頭公逝既三年　政局風雲幾變遷
欲起毅雄談往事　大慈寺畔雨如煙

大慈寺憶故原首相

大慈寺畔風蕭蕭　過雁聲聲雲外遙
惆悵追懷感無限　偉人不見轉魂消

歸省秋田縣岩崎邑

鳥峯山北卜新居　花月園林好讀書
此去都門三百里　翠松深處是吾廬

湘南別莊書懷

出岬無心雲任風　去來千變西還東
樓頭靜見朝昏景　天下興亡在眼中

經世界大戰爭遺趾

白兒檀砦鎭平蕪　虎擲龍拏近佛都

十晝夜間唯退却　徐元師力轉寰區
伯　林
敗餘不屈國新興　醫得瘡痍勢欲騰
武略文韜呑宇內　巨人像下月爲明
訪比公舊盧
史傾鐵血壯心傳　興國熱情能動天
定計舊盧如待主　綠陰深處憶前賢

この詩に見ると氏は原氏を憶ふの情切なるものがある。氏常に原氏に付てこのやうに云つてゐる。

原氏は生前には幾多の非難を受けたが一點の私心なき公明なる政治家たるの眞骨頭は死後日を經るに隨つて分明にされたことは自分は喜ぶのである。人の眞價は棺を蓋うて定まるといふけれども自分等のやうに氏が未だ棺を蓋はざる前からよくその眞價を知りその性格や手腕や力量や識見や抱負に敬服して居たものは、其の生前に於て常にその眞價のある所を明にして以て誤解を防止するに努めたのであつたが、遂に取返しの付かない結果に終つたのは、地下に眠れる故人に對して相濟まぬ感じがする。云々

と述べ更に「實に今日から之を考ふれば千秋の恨事として斷腸の思に堪へないのである云々」氏としてはさもあることであらうされば氏が詩作中原氏に對する作詩は比較的多いのも亦氏の心境が窺かれるのである。

提げたる氏の詩作中ビスマルクの舊邸を訪ふに付て氏は比公の感想を永く書かれてゐるがその中に、

公の舊邸は極めて簡素にして輪奐の美とてはなく、獨逸帝國大宰相の住宅とは思はれぬ程のものであるが、其の庭園は廣濶にして遠く有名なるザクセンの森に連り幽邃閑雅風光絕佳である。

と比公邸の模樣を述べ「此の邸は今尙ほビスマルクの家に屬して公の孫に當らるゝ後繼者が住んで居る主人が不在であつたが執事は喜んで余を迎へ各室より庭園に至るまで鄭寧に案內して呉れた、公の書齋は二十五六疊位の小さなる室であつて、其の四壁には皇帝や夫人親戚等の寫眞が提げ

られ机上には種々の書籍や公の日常使用せられたるインキ壺、ペン、紙等が存してあり時計は十一時前五分を指してゐる。之は公が永眠せられた時間を示してゐる」と書いて更に「公は大宰相の職を辭し此所に閑居せられた後に於ても心尙君國に存し八十二才の高齡を以て長逝せるその最後に至る迄國事を憂へて止まなかつた忠誠の心事である」と云つてゐる。其他世界大戰爭遺趾伯林等の題詩は第一次世界大戰の敗戰國獨逸の國情や、ジョンフル元帥の巴里近郊獨軍擊退佛國救濟の狀況等を今次の歐洲大戰に比較して往昔を追憶し感慨無量であるから、こゝに氏の作詩の一二の例を提げたのである。以て讀者諸賢の參考に供するものである。

× × ×

× × ×

聞香閣記

茂亭　鄭萬朝

易曰、同心之言、其臭如蘭、書曰、明德惟馨、夫息之芳者爲香、香之遠聞者爲馨、不同心而言、其言不香不明以爲德、其德不能遠、何也心不同則若薰蕕之判、雖與之言、何以有香、德不明則若花草之薦者、雖微有香、其何以及遠也、香堂水野相公、以高明之學、導一世于文明之圍、監政務於櫂城萬里之外、其德可不謂遠乎廼選休公之日、招延文學之士、集其官邸、披胸襟簡禮數、盃酒翰墨淋漓驩嚣、先題一詩以叙、故人相見笑談和融之意、四座依韻以和之、靡有不同公詩之意者、可不謂同心之言乎、詩畢而酒復行、公諗于衆賓曰、吾儕之遊是邸也、不可以無述、而是邸之供吾濟遊者、亦不可以無名、遂命其扁曰聞香閣、屬萬朝記之、是日登是閣者、莫不以飽公馨德爲幸、而公以聞同心者之香爲樂、閣之所以名也、推此而知公之令聞日以愈遠、天下之士其將于然携手而來同也、於是乎揣公素以香堂自署者、其意已遠矣乎哉、萬朝亦具一瓣香、敬爲公書之。